

活動の内容

保存活用	炭鉱遺産の保存・活用
調査研究	炭鉱遺産の調査・研究
活動支援	炭鉱遺産の保存・活用の市民活動を支援
普及	炭鉱遺産の普及啓蒙・サポーターづくり
展開	環境教育やヘリテージツーリズム
交流	会員や市民団体相互の交流
収益事業	物品の販売、飲食・サービスの提供

これまでの経緯

1998年	空知支庁の独自事業を契機に、空知旧産炭地域の各地で炭鉱遺産に関する市民活動が徐々に活発化
2001年	「空知の炭鉱関連施設と生活文化」が北海道遺産に指定
2003年	日独交流ワークショップの開催(三笠市・美瑛市) 国際鉱山ヒストリー会議の開催(赤平市)
2004年	炭鉱遺産を巡って歩くキャンペーンの実施
2005年	管内全首長が出席した炭鉱遺産サミットの開催(夕張市)
2006年	夕張市の財政破綻が表面化し市内の炭鉱関連施設が閉鎖
2007年	1月: 石炭博物館の指定管理者応募のため任意団体を設立 3月: 活動対象範囲を空知全域に拡大しNPO化へ準備 6月: NPO法人として登記完了
2008年	タウンウォッチングの開催(夕張市・三笠市)
2009年	そらち炭鉱の記憶マネジメントセンターの開設 幌内アートプロジェクトの開催

ホームページ

<http://www.soratan.com>

会員を募集中

種別	年会費	備考
一般会員	3,000円	
運営会員	10,000円	総会議決権を有す NPO法上の社員
賛助会員	20,000円	法人・個人を問わず 一口あたり

WEBから

ホームページからお申し込み下さい。
入会資料と郵便振替用紙をお送りします。

郵便振替で

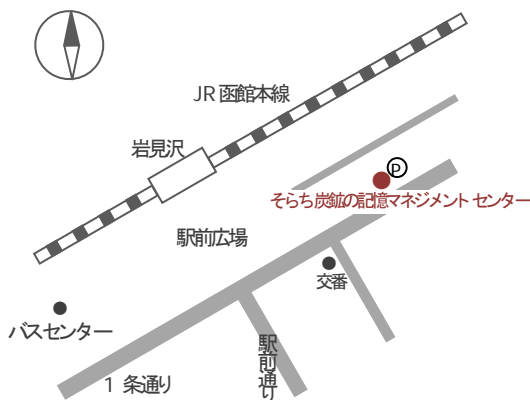
郵便局に備え付けの「払込取扱票」に
①会員種別②お名前③ご住所④電話番号
をご記入の上、年会費をご送金下さい。
02790-1-44048 炭鉱の記憶推進事業団

役員

理事長	吉岡 宏高	札幌国際大学 観光学部観光学科 准教授 ■国内旅行業務取扱管理者 ●北炭幌内鉱出身
副理事長	植村 真美	赤平青年会議所 理事長 ●赤平市在住 ○赤平コミュニティガイドクラブTANtan企画担当
理事	熊谷 隆文	元・石炭博物館 館長 ■学芸員 ●夕張市在住
	佐藤 裕子	西野回陽堂 ●夕張市在住 ○元・夕張青年会議所理事長
	三上 秀雄	赤平コミュニティガイドクラブ TANtan 会長 ■普通高山保安技術職員 ●茅沼鉱出身、住友赤平鉱勤務、赤平市在住
監事	大橋 二郎	大橋設備工業 常務取締役 ●芦別市在住
	加藤 愉朗	カト一看板 ●赤平市在住

マネジメントセンター

- 開館時間
午前10時～午後6時(4月1日～11月8日)
午前11時～午後5時(11月9日～3月31日)
- 閉館日
毎週火曜日
- 交通
JR函館本線特急利用で札幌より25分、岩見沢駅下車
徒歩1分
- 住所
〒068-0021 北海道岩見沢市1条西4丁目3
TEL 0126-24-9901 FAX 0126-24-9902

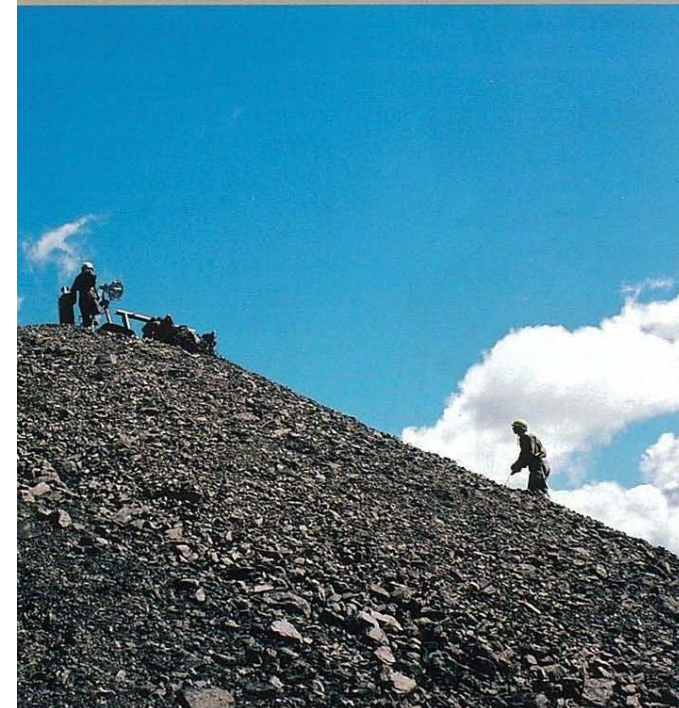


表紙写真●斉藤靖則さん(元北炭幌内鉱坑内員)

明日に生かす

炭 鉱
ヤマの記憶

炭鉱の記憶で未来を拓く

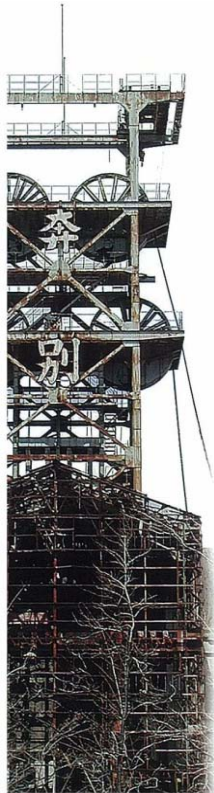


空知のエンジン

ヤマ
NPO法人 炭鉱の記憶推進事業団

北海道近代史の窓

全ては ヤマから 始まった



身近にあるヤマ

皆さんは、空知に来なくても、容易に各地で炭鉱の記憶に接することができます。

例えば、新千歳空港から見える森は、かつて坑木として植林されたものです。

他にも、室蘭の製鉄・鉄鋼、江別の煉瓦、戦後の生協運動、タクシ一会社、札幌宮の森住宅地、テレビ局、映画館のオールナイト上映、地質コンサルタント…炭鉱を起源とするものが、今日の暮らしを作ってきました。

そして何よりも、皆さんのご先祖・両親や知人に、必ず一人は炭鉱の関係者がいるはず。炭鉱遺産は、自分の身近な人が、北海道で懸命に生きてきた証でもあるのです。

「事業団」に込められた意図

エネルギー革命が吹き荒れた1960年代、国の強力な産業政策によって炭鉱は次々と閉山しました。スクラップ=アンド=ビルドを実行したのが、石炭鉱業合理化事業団 [1960年設立、現在の新エネルギー・産業技術総合開発機構=NEDO] です。

2007年、北海道と空知の歴史を築いてきた炭鉱の記憶を、地域の再生に向けてクローズアップしようと、私たちは炭鉱の記憶推進事業団を結成しました。

国の産業政策の下で忘れ去られたものを、今度は市民の手によって蘇らせる。石炭鉱業の合理化から、炭鉱の記憶の再生へ。

そして、単に検討だけで終わらせず、着実に、確実に実行しようという決意。このような意図から、あえて事業団を団体の名前として採用したのです。

石炭を通じた連帯 ヤマは つながって いる



ヤマのネットワーク

雰囲気や習慣はヤマごとに異なり、とても個性的です。しかし、同じ「炭掘り仲間」としての連帯は強いものがあり、それは今でも変わりません。

ヤマのつながりは空知にとどまりません。石炭の生産・流通を通じて、小樽・室蘭・苫小牧や江別をはじめとする道内各都市や、国内へとつながってきました。

さらに、かつて機械・技術を導入してきたドイツ・ルール鉱業地域やイギリス・南ウェールズ地域とは、近年になって炭鉱の記憶を活かした地域振興をテーマに交流が展開されています。

このようにヤマの輪は、道内から世界へと広がっています。



事業団が目指すもの

対象

空知旧炭産地域に住む人々や訪れる人々に対して

手段

有形・無形の炭鉱遺産を将来にわたって継承し公開することで

目的

地域固有の歴史的な文脈の意義と価値を認識しそれに基づいた地域の活性化に寄与します

空知 炭鉱記憶の「場」 いま 過去と未来が 結ばれる



炭鉱(ヤマ)の記憶

炭鉱は多くのものを残しました。立坑やズリ山は形あるものとして、ナンコ料理や盆踊り、炭鉱マンの思いは形なきものとして、いまでも空知に息づいています。わたしたちはこのような炭鉱が残した有形・無形の資産を炭鉱(ヤマ)記憶と呼んでいます。

そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター

多くの人々が炭鉱遺産を訪れます。そこにアートや歴史、アウトドアアクティビティなどで「場」を作ると、場のもつ力によっていろいろな思いが呼び起こされます。そして、その思いによって地域に活力が生まれ、新たな価値の創造へとつながります。そんな地域づくりの「場」を作り、空知内外の地域と炭鉱の記憶を結ぶ拠点として、そらち炭鉱の記憶マネジメントセンターを開設しました。炭鉱遺産や地域の情報を提供する、コンシェルジュとしての役割も果たします。

クラシックな石造り

JR 岩見沢駅のすぐ近くに石造りの古い建物があります。いまでは少なくなった札幌軟石造りの趣あるクラシックな建物で、昔は卸売雑貨店でした。ここから鉄道で炭鉱街に行商に出かけました。かつての炭鉱と鉄道の発展を象徴するシンボリックな建物をセンター事務所としています。また明治42年に建てられた蔵も併設。以前はたばこの倉庫として使われていました。ギャラリーやコンサートなどのスペースとして活用しています。